
ラワン

麟太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラワン

【Zコード】

Z2680A

【作者名】

麟太郎

【あらすじ】

昔むかし、北海道に暮らすパシクルの身に起こった不思議な物語です。

パシクルはユーパロの「タタン」（集落）に住む若いアイヌである。

妻の名はクナイと言つた。

二人は四百人近いアイヌが暮らす「タタン」の中でも沢に一番近い場所に住んでいた。

クナイは夏の或る日、ふき路を採る為、沢に分け入つた。

その年の路の生長は見事で、その朝の彼女は両手に持ち切れない程の食料を摘むことが出来た。

その夜のことだった。

「パシクルよ…」

自分を呼ぶ声に気付きパシクルは小屋を出たが、彼の目は声の主を見付けることが出来なかつた。

氣の所為などではないと思いながらも戻るつとする彼を、今一度低い声が呼び止めた。

「パシクルよ！」

再び闇に向き直るパシクルは、脛くらいの背丈しかない老人を見留めた。

「あ…あなたは一体…？」

パシクルは小人と呼んで差し障り無い老人に目を見張つたが、当の本人はそんな彼の様子など意に介せずと言つた風情で話を続ける。

「儂は路下族のイナウ。

パシクルよ、お前の一族のことは遙か昔から知つておる。

お前の一族は長く沢を守つてくれてある…パシクル、お前も若くして両親を亡くしたが、先祖の言い付けを守り、毎日感謝の念を忘れず善く生きておるとと思つ。

「だが…」

老小人は、しばし言葉を切つたが、思い直したよつて次の言を告げた。

「パシクルよ…お前の嫁は、儂らの気に障ることをしてしまったな…。

クナイは今日、お前達一人では食べ切れない程の路を摘みあつた。しかも、持ち切れない路を沢に落として行きあつた…！」

「イナウ殿、妻は知らずにやつたことなのです…！」

よくよく言い聞かせ、一度とこのようなことはさせませぬ故、何卒…」

「言い訳は無用じゃ…」

老人はかぶりを振つた。

「我が一族の怒りは、既に呪いとなりつつあるのじゃ…。

…パシクルよ、お前のコタンは飢えなければならぬ。そして、お前自身は歓声を挙げることにならつ…！」

「…飢え？」

…歓声？

待つて下さい！

…一体、それは…？」

パシクルは必死で尋ねた…が、もう遅かつた。

彼の眼前には、漆黒の闇が広がるばかりであった。

夏が過ぎるとコーパロのコタンは急ぎ足で冬へ向かつ。

集落に住むアイヌ達はこの時期、雪と氷に全てを鎌される季節に備える。

だが、この頃になるとコタンの誰もが異変めいたものの一端を肌で感じていた。

どんな弓の名人も鹿を仕留めることができず、どんな巧みな罠も狐一匹、兎一羽捕らえることが出来なかつた。

川を銀鱗で染め尽くす筈の鮭は一尾も帰つて来ず、暑い盛りまであれ程の実りを与えた山は木の実一つ着けてはくれなかつた。

イナウがパシクルに告げた話を長が聞いたなら、それこそ次の日すぐにも対策を立てていたかも知れない。

しかし、イナウは路下族だけが知る古からの呪い（まじない）でも

使つたのか、ともかくパシクルは忘れてしまつていたのだ。

老人の姿が消えたと同時、それこそ立ち所に。

そんな訳もあり、コタンの長老達は、近隣の集落との和解を急がなかつたのである。

飢饉が起きた場合、コタン同士の相互扶助が常であるが、悪いことに春先のちょっとした諍いが元でコーパロのコタンは孤立していたのだ。

若者達は長老達に訴えた。食糧の貯えが底を尽くる前に近隣のコタンと和解し、援助を求めて欲しいと。

しかし、長老らは首を縦には振らなかつた。

狩場を荒らしたのはそもそも隣の集落であるし、そんな自分達の主張を全く認めなかつた周辺のコタン連合の歴々などに頭を下げようと考えるには、長老と言えどもまだまだ若過ぎた。

若者らは考えた。

エカシ（長老）達のあの様子では近隣コタンの助力はとても望めそうに無い。

このままでは冬を越せそうにないことは、実際に狩りに出る彼らが一番感じていた。

実際、夜も更けたと書いつの間に虫の音すら聞こえぬのは尋常である筈が無い。

「俺は…子供の頃に聞いたことがある…」

煮詰まつた空気が肩に重くのしかかる中、暫く続いていた沈黙を破つたのはパシクルであった。

「…東の山々の向こうにはカムイが住むと…。」

「…ああ…俺も聞いたことがある…。」

…遙か高い山を幾つも幾つも越えると、そこはカムイモシリ（神々の地）だつてな…。」

「パシクル…こんな時にお前、なんでもまたそんな話を…？」

…まさかお前…」

「狩りも漁もさつぱりだ…。」

…「Jのままチップ（食糧）の当たが立たないな…」

「……立たないなら？」

「…俺達に出来る事は幾つもない…」

…もう一度エカシを説得して他のコタンに助けを求めるか…

…他のコタンに戦を仕掛けるか…

…カムイモシリを目指すか…

…後は…」

「……後は？」

「……後は…なんだと言うのだ、パシクル…？」

「……飢え死にするくらいしかないじゃないか…！」？」

カムイモシリを目指し山越えをする人員の選考が行なわれたのは、次の日であった。

若者達が中心となつたのだが、エカシ達に刃をちら衝かせつつ周辺のコタンとの懐柔を謀るまでに彼らの分別は無き過ぎはしなかつたし、長老達のように自分達の命をカムイの天秤に載せようとする程に彼らは齢枯れてはいなかつた。

希望者はコタンの四分の一に達し、パシクルらはこれを更に半分に絞つた。

勿論、先の宵パシクルの家に集つた者は全員が含まれていた。

長老連は当然の如く彼らの行動を非難し、パシクル達がやろうとしている事が如何にカムイの意に沿わぬことであるかを説いた。

が、エカシは充分過ぎる程わかつてもいた。それが如何に無駄な説得であるかと言う事を。

コタンの中心に位置する長老の家にパシクル達が呼ばれたのは日が傾き始めた頃で、出立が一回目の朝と決まつたのは夕方、そして神の地に向かう若者達に一日分の食糧の八倍を持たせる事が決まつた頃には漆黒の闇が辺りを覆つていた。

コタンに蓄えられたチップの量を考えれば、それは寛大が過ぎる程の措置であった。

旅が始まった。

アガニは崖から落ちて死んだ。

ニンクシは雷に打たれて命を落とした。

キクルムは疲れ果てしゃがみ込むと一度と立ち上がる事がなかつた。

旅は難航を極めた。

彼らは知る由も無かつたのであるが、パシクル達が越えようとしている山々は、私達の言葉で言つと千五百メートル級の山脈なのである。

山を登り始めた時、道なき道を歩む彼らが唯一の抜けとした獸路など、三度朝を迎えた頃には影も形も無かつた。

それにして鳥獸の類は「antanより遠く離れた山の中ですらこれ程姿を見せぬとは。

彼らの前に現れたのは、唯一キムンカムイ（ヒグマ）のみ。冬を待つ彼らの恐ろしさをよく知るパシクル達は注意に注意を重ねてヒグマとの遭遇を避けたのであるが、それでもその爪に懸かつた者は少なくなかつた。

シャクシャも。

キハルチも。

AINYUも。

ヒリニウも。

そして、その多くは狂暴な牙の餌食にもなつた。

スピキ一も。

チイキ一も。

サンニテも。

ユワミも。

チミイチも。

幾つの山々を越えて来たのかわからなかつた。

唯、彼らが持つ概念を超えた数の山を登り降りして来たのは確かであつた。

そんな、永劫とも思える冒険を乗り越えて来たパシクル一行が更に

一つの登頂を終えた時、彼らの眼下には広大な平原が白々と横たわっていた。

伝説でのみ耳にした神の大地をその目で見た者は、自身の持つ数の概念で理解出来る程の人数を残すのみであった。

あれだけ居た屈強な男達は、五人だけとなっていたのだ。

だからこそ僅かな食糧でここまで悠かな道程を凌いで来れたのであるが…。

熊笹生い茂る山裾から葦に覆われた平地に足を踏み入れた、カムイモシリに分け入った彼らはしかし、絶望に近い感情に支配され尽くしていた。

伝承によれば、山を越えればそこは神々の地なのだ。

カムイ住まわる地とは、このよつた荒涼たる平原であるのか。

アイヌモシリ（人の地）と同じく、冷たい風も吹けば雪が大地を覆い隠すのか。

願いを口にしよう。

命を落とした同胞の為、飢えに苦しむコタンの為。

元より食糧の尽きたパシクル達には、この地で希望を見付ける以外に何も残されてはいないのだ。

「カムイよ！ 聞き給もう！！」

「我らがコタンに銀鱗の群れを！」

「我が手に春を迎えるだけの木の実を！」

「腹を空かせた子供達に鹿の肉を！」

「孤立した我がコタンに平和を！」

「カムイよ…願い乞い乍ら死んで行つた我らの同胞の命では…足らぬと言われるのか…カムイよ…」

パシクルが発したのは言葉と言つよりは泣き声となつた。

嗚咽は他の者にも伝染し、辺りには五人の哭声が響き渡つた。が、その喚き声はただ空に呑み込まれるだけであった。

がつくりと膝を着いた一行の中、パシクルは不図視線を上げた。遙か前方の上空を、何かが舞っているのが見えた。

「……皆んな立て！！

見よ……

コタンクルカムイだ……！」

パシクルは言うが早いか走り出した。

直ぐ様、他の者も後に続いた。

コタンクルカムイ、集落の守り神の意で、即ち梟のことである。名が暗示する様に、その鳥はコタンの間近に巣を作る。

その上、未だ明るい内から梟が飛ぶなど珍しくない訳がない。

パシクルが一心にコタンクルカムイを追い掛けたのは無理なからぬことなのだ。

そして何より、鳥なぞ暫く目にすることすら無かつたではないか。彼らが不乱に梟に追い縋つたのには、充分過ぎる程の理由があったのである。

どれくらい走つただろうか。

パシクル達の前方上空には、計つたように同じ速度で飛ぶコタンの守り神の姿があつた。

息が切れそうになることも忘れていた。

早鐘の如く胸を打ち続ける心臓の音も、彼らの耳には届かなかつた。

「見ろ！！

梟の飛ぶ空の向こうを差し示すパシクルの指の先に、旅人達は幾筋もの立ち昇る煙を見付けた。

「ああ……

……これは……これは……！！

尚も走り続ける彼らの鼻腔を擦つたのは、間違えようもない匂いだつた。

それは、鮭の焼ける香であった。

天高く聳える山々を越えて来た長久たる冒険の日々。

辿り着いたのはカムイモシリではなかつた。

悠久の時を越え、人間達がその営みを刻んで来たアイヌモシリであった。

雲衝く山脈の向こうには、パシクル達と同じくアイヌが暮らす大地があつたのだ。

「トカプチ！（やつた！）

トカプチーーー！（やつたーーー！）」

周囲の空氣をつんざかんばかりの歓声が、パシクルらの咽の奥から沸き上がつた。

堰を切つたように熱い物が人々の頬を伝つた。

「トカプチ！」

「トカプチ！」

「トカプチ！」

「トカプチ！」

「トカプチ！」

「トカプチ！」

「トカプチーーー！」

コタンに迎えられたパシクル達は、エカシらに事の次第を話した。集落の相互扶助はこの地方も同じらしく、食糧の援助の約束を取り付けたが、直ぐにでもユーパロに帰りたいとの彼らの願いは猛反対に遭つた。

山々は既に白く染まつており、とても越えられそうもなかつた。歓喜に沸き返つた五人はこうして餓えの心配は無いにせよ、絶望に近い感情と共に春を待ち侘びることとなつた。

そこまでの時間を掛けてチップを持ち帰つたところで、コタンが、彼らの家族が飢え死にしていない可能性が高いとは到底思えなかつたのだ。

冠雪が消えると同時に、パシクルらは復路を踏み始めた。

幸いなことに一人の脱落者も出す事はなかつたが、ユーパロのコタンに到着した頃には、既に大地が緑溢れる時候となつていた。だが、彼らの足取りは軽やかだつた。

コタンは人々の命の営みに溢れていた。

パシクル達は喫いだのだ。ここでも…鮭が焼ける香を。

「あなた達が旅立つて暫く経つてからのことだつたの。」

クナイはパシクルとの再開の抱擁もそこそこに語り出した。

「…川が銀色に染まつたのは…！」

「…トカプチ…！」

パシクルはもう一度妻を抱く腕に力を込めた。

すっかり目立つようになつた彼女のお腹を気遣いながら。

「『トカプチ』か…誠に善き言葉ならんや…。」

遠目にこの様子を伺つていた山向こうのアイヌ達は微笑みを浮かべ咳いた。

コタンを救う為の食糧はパシクル達だけでは運ぶ事が出来ず、数十人の援助隊が結成されていたのだ。

彼らは再び山を越え故郷のコタンに帰ると、何時からか自分達の集落をトカプチと呼び始めた。

今日私達がその土地を称する『十勝』の名に、伝承の一端を窺い知る事ができる。

「イナウ殿…。」

パシクルの家に程近い沢に足を踏み入れた者があつたなら、微かに響く声を聞いたかも知れない。

「…イナウ殿、あなたは予想していたのですか…？」

「…クシリカ…。」

儂はただ、飢えたアイヌが遅れて来た銀鱗の群れに歓喜の声を挙げるだろうと思つていただけじゃ…。

…それにも…

…人間とは、げに危険なものとなつたことよ…この期に及び何故喜べるのであろうか…。

…そうである?

少しの間を待つことが出来たなら、鮭が戻つて来るのを知つたのいや…あれ程の贊をカムイに捧げることも無く、な…。」

ラワン路の大きな葉が揺れたのは、風の所為であつただろうか…。

〈了〉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2680a/>

ラワン

2010年12月9日00時57分発行